

自分の課題を認識し、改善しようとする態度や意欲を高めることをねらった実践例

〈2年生Cグループの取り組み〉

(1) コミュニケーションの実態

2年生課題学習Cグループは、男子1名、女子2名、計3名である。Cグループの生徒の共通した課題はまず、自分を見つめる力が十分育っていないために、自分の苦手なことやできないことを認めることが難しいことである。そして、ことばによる指示の理解は比較的良いが、関わり方が未熟なため、相手に良くない印象を与えがちな傾向がある。また、手指の巧緻性が乏しく、細かな作業をていねいに確実にすることが苦手だという実態も見られる。

K男は、生活経験の不足や人間関係が限定されているためか、全ての活動で指示待ちの傾向があり相手と正対してはきはきとやりとりすることが苦手である。F子は、自分の障害を受け入れることが難しいために、声かけや指示に素直に従えなかったり、自分はできるという意識が強いため、指導者の目がない場面では、友だちに対して命令的な対応をしがちである。G子は、不安や緊張感があると、相手に攻撃的な口調や態度で対応しがちな傾向がみられる。

この3名の生徒にとって、対人関係を調整する力や円滑にやりとりする方法を身につけておくことは、直面している優先課題であると考えた。

(2) ねらい

- ・自分の課題を認識し、目的意識を持って学習に取り組もうとする態度を養う。
- ・自分の思いや考えがうまく相手に伝わるように自己表現する方法や態度を身につけさせる。
- ・作業的な活動の中で養護・訓練的な働きかけをし、手指の巧緻性を高めることをねらう。

(3) 指導方針と手だて

- ・学習活動としては作業的な要素を多く含むようにするが、養護・訓練的なねらいを一人ひとりに設定して取り組ませ、単に作業量の変容や技能の習得のみで終始しないように配慮する。
- ・生活一般の学習を直接的に補うような内容を題材として取り上げて、課題学習での成果が生活一般の中でも発揮できるようにし、Cグループでの活動への必要感や成就感を高める。
- ・目的意識を持って学習に取り組めるように、近い目標としての1時間ごとのめあてと、遠い目標としての一人ひとりのめあてについて導入部分で扱うようにする。なお、このめあては、生徒自身で自分の課題を十分に認識するのが難しい実態のため、指導者が一人ひとりにわかりやすく提示していくようにする。
- ・生活一般の学習場面の中でも「～さんは、課題学習でもう少し練習をした方がいいですね。」とか「～について課題学習の時によく勉強ときましよう。」などの声かけをし、学習の関連性をあらかじめ提示したり、必要感を持ち納得して課題学習に取り組んだりできるように配慮する。
- ・生徒の活動場面を十分に確保するように、必要なことばかけのみを簡潔に行う。
- ・作業の中で報告や質問をするように意図的に設定し、伝わらない表現や好ましくない態度の時には、はっきりと指摘し、直さねばという必要感を持たせたい。良い例としての模範も示したい。

(4) 指導計画

月	生活一般の単元および題材	課題学習の単元および題材
4	○ぞうきんづくり ・手縫いとミシンによるぞうきんづくり	○手縫いによるぞうきんづくり(4) ・糸通しの使い方 ・玉止めの仕方 ・針の扱い方 ・待ち針の打ち方
5	○技能作業競技大会に向けて ・大会の趣旨、競技種目の練習	○ボールペンの分解と組み立て(4) ・分解と組み立ての方法と作業の段取り ・分解と組み立ての練習
6	○わたしたちの障害 ・できること、できないこと	○わたしの障害(1) ・自分の障害と苦手なこと
7	○夏休みのくらし ・生活時間、スケジュール、宿題 ○作業「中国大会の準備」 ・袋づめ作業	○個別メニュー(5) ・K男……ボールペンの組み立て ・F子……玉のれんづくり(夏休みの宿題に発展させる) ・G子……封筒ののりづけ、案内状の折り作業

※3名によるCグループでの課題学習は1学期に集中して取り組んだ。2学期以降は別の観点でのグループ所属とした。

(5) 指導の実際

○「個別メニュー」での実践例

a. 題材設定の意図

指導計画にあるように、生活一般に関連した手指機能を使った活動を4～6月中旬まで実施し「自分たちは手先が不器用だ。」「質問や報告がうまくできない。」というようなことを生徒自身が自覚するようになっている。また、自分の障害について、一人ひとりにわかりやすく学習したこともあり自分の苦手なことや努力すれば改善できることは何なのか意識して学習に取り組むようになってきている段階である。そこで、ここではさらに個に応じた課題解決をしていくために、一人ひとりのねらいに適したメニューを準備した取り組みを行うこととした。

b. ねらい

氏名	コミュニケーションのねらい	手指機能向上でのねらい
K男	相手に正対して、歯と歯を離して話をする。	左右が違う手の動きをして作業する。
F子	相手の目を見て最後まではっきりと話す。	右手を使い、ひも通しを早くする。
G子	注意をうけた時、穏やかな口調や態度で対応する。	端と端をきちんとあわせて作業する。

c. 生徒の様子

	指導の手だて	生徒の変容
K 男	<ul style="list-style-type: none"> 鏡を見て自分が相手に正対していないことを認識させる。 相手に正対するための、足の位置・首の曲げ方・視点・見方など具体的に指導する。 わかるように伝えていないのにわかったような対応をしない。 	<p>初めは、自分が相手に正対していないという意味が理解できなかったが、鏡を見て自分は斜めに構え相手を下から見上げるようにして対応していることに気づいた。両足の障害と首の筋力の弱さから、なかなか正対が難しいが、声かけをすると直そうとするようになった。歯と歯を離して話さない時には「指3本入るくらいあけて」と声かけをすれば、はっきりと聞き取れる声で話すことができるようになったが、まだ声かけを要する。</p>
F 子	<ul style="list-style-type: none"> 目を合わせて話さない時には対応せず、気づくまで待つ。 視線を合わせて話している時には、相づちを打つなどして暖かく受容的な態度で対応し、視線を合わせたやりとりが良いのだという意識を育てていく。 	<p>自信がないこと・失敗をごまかそうとする時・注意を受ける時には、ほとんど視線を合わせず外や横を見ていたり、一斉指導の時には外や時計をちらちらと見たりすることが多かった。F子の態度に応じてははっきりとした対応を指導者が示すことで、自分の態度が人に不快感を与えていることがわかるようになり、自分の都合の悪い時でも、自ら視線を合わせて話そうとするようになってきた。</p>
G 子	<ul style="list-style-type: none"> G子の対応の様子の良い時と悪い時について友だちからの意見を聞く場を設けたり、ビデオで見せるなどして、自分自身を振り返らせる。 無意識に表情がこわばったり口調がきつくなるので、その時は声かけをする。 	<p>自分の力を十分に認識できておらず、がんばったらできたことになるという理解の段階のため、できていないことや不十分さを指摘されると、認めれず怒ったような態度をしてしまいがちであった。自分の障害やできること・できないことなどを学習する中で、少しずつ自分の力を理解し、『自分』の姿を意識できるようになり、今の自分の態度はよくなかったと反省したり、注意を受けても穏やかに対応しようと努力している様子が見えた。</p>

(6) 考察と今後の課題

自分の苦手なことやできないことを認めることがなかなか難しい生徒たちであったが、作業的な活動の中ではできないことが自分たちの目にはっきりと見えるため、自覚を促すには効果的であった。また、同じような課題を持つ3名でグループ編成したことにより、一斉指導の中ではなかなか難しい個に応じた働きかけができ、一人ひとりの生徒にはっきりと課題を提示して、それを解決・改善するような場を保障することもできた。しかし、Cグループで学習した成果が学級の活動の中でしか十分には生かされていないという現実もあり、さらに生活に根ざした、生活に生かせるような取り組みを心がけていく必要を感じる。 (小杉)

